

2023年度 入学試験問題



(6 0 分)

〔 注 意 〕

-
- ① 問題は㊦～㊨まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお出題の関係上本文を一部改めた部分がある。

「文化的」とはどういうことか。精神をコウヨウ^アし、心を動かす。その人の生活に何らかの影響を与える。^(主)刹那的な刺激への反射に終わらず、記憶として定着する——あつまり言えば「心に残る」。ここに文化的情報財とそうでないものの境界線がある。

書籍や新聞、雑誌の言論は知識と知見を提供する。その一部は読者の価値基準に影響を与え、教養を形成する。私にとって高峰秀子『わたしの渡世^{とせい}日記』との出会いはシヨウゲキ^イ的だった。以来、日常の仕事や生活の中で「高峰秀子ならどう考えるだろう・どうするだろう」と自然に自問するようになった。文字通りのディープ・インパクトだ。高峰秀子の著作群は自分の価値基準の奥底にあり続けている。

(中略)

文化には暇つぶし以上の意味がある。文化的価値を享受しようとするとき、人々はより能動的に情報財に向き合う。読書習慣を持つ人は、紙であろうと電子版であろうと、読みたい本は買って読む。映画が好きな人は、有料サービスに加入して居間の大画面テレビで映画を鑑賞する。ときには入場料を払って映画館で映画を観る。スポーツ好きの人は、スポーツ専用チャンネルに課金して試合の実況中継に見入る。音楽を楽しむ人は、広告に邪魔されない環境で有料の音楽ストーリーミングを利用する。素敵なジャケットに包まれたアナログのレコード盤を購入することもある。

スポーツや音楽の分野では、しばしば最^{ひいき}肩のチームの試合をスタジアムで観戦したり、好きなアーティストのコンサートやロック・フェスに出かける人もいる。他のオーディエンスとの一体感も含めて、スポーツや音楽を五感で楽しむ。こうなると情報財というより、経験財と言った方がよい。

文化的情報財は安い。クルーガーは、音楽が多くの人にとって重要な意味を持つ財であるにもかかわらず、その市場規模は驚くほど小さいという指摘をしている。二〇一七年の米国の音楽に対する支出総額は一八三億ドルに過ぎなかった。GDPの〇・一%以下、タバコ市場の五分の一でしかない。私は喫煙者なので、タバコは文化的情報財^{しこうひん}だと思っているが、それにしても、音楽市場の規模はタバコの広告市場よりも小さい。音楽は人々の生活への影響が大きい割には支出が少ない。クルーガーに言わせれば「断トツのお買い得」ということになる。

¹本はもつとお買い得かもしれない。イアン・カーショー『ピトラ』とサイモン・セバーク・モンテフィオーリ『スターリン』、この二冊のノンフィクションのケツサク^ウを続けて読んだことがある。合わせて三〇〇〇ページ以上、価格も合計で三万円。高いと思

うかもしれないが、とんでもない。ちょっといい店にお鮓^{すし}を食べに行けば、二人で三万円はかかる。そのときは美味^{おい}しいだろうが、しょせん二時間の愉快だ。

一方書籍は休日集中して読んだとしても、二作で一ヶ月はとつくりと楽しめる。しかも、自分が生きる社会と自分自身の生き方について、いやというほど考えさせられる。そこから明日を生きるための価値観を引き出せる。読んでいる間だけではなく、思考と行動の基盤として、その価値が一生続く。これだけの教^え知^ちをたっぷり味わえるのだから、腰が抜けるほど安いと言っても過言ではない。この世のありとあらゆる財の中でこれほどディスカウントされているものは他にない。しかし、タダではない。

(中略)

仕事は趣味ではない。趣味ではないものを仕事、仕事でないものを趣味と言う。趣味は自分(だけ)を向いた活動だ。自分が楽しけばそれでよい。これに対して、仕事は他者を向いている。自分以外の誰かの利益になってはじめて仕事となる。

趣味のロックバンド「ブルードッグス」を三〇年以上続けている。渋谷の「T&E OFF」で定期的にライブをやっている(ライブハウスでのオールスタンディングのライブは究極の三密なので、一年以上バンド活動は中断している)。趣味であるからして、目的は「演^やっている自分たちが一方的に気持ちよくなる」ことにある。厄介なのは、観^みてくれる人が多いほどこっちも気持ちよくなるということだ。バンド内では、ライブに来てくださるお客さまを「犠牲者の方々」と呼んでいる。

ライブをやるたびに犠牲者の方々を熱心に募る。しかし、わざわざライブに来てくださる人は少ない。もちろんスポンサーもない。その理由ははっきりしている。価値がないからである。なぜ価値がないのか。これまた理由は明々白々で、趣味だからである。

A 他者に価値を提供することが目的になっていない。ブルードッグスの活動は常に「無人ライブ」のリスクに直面している。

私は競争戦略という分野で仕事をしている。競争がある中で、なぜある企業は儲^もかり、ある企業は儲からないのか。その背後にある論理を考える。考えたことを言語化し、それを書いたり話したりしてお客さまに提供し、なにがしかの役に立ててもらおう——これが私の商売だ。

B 、ボランティアで書いたり、講演したりすることもある。しかし、それはこちらに文字通りボランティア(自発的)な意志があるときに限られる。商売である以上、普通はお代を頂戴する。企業相手の仕事であれば、こちらに特別な意志がない限り、仕事の内容に応じてどなたさまにも決まった額の報酬を請求している。原則的にディスカウントには応じない。

この一〇年ほどは、副業として随筆や書評も書いている。趣味の延長上にある仕事とはいえ、こうした原稿は私にとってもはや趣味ではない。商売であるからして、依頼を受けたときは、必ず原稿料を明示してもらっている。もちろん私ごときの随筆や書評ではない

したおカネにはならない。それはそれでいい。大切なのは、金額を決め、双方が合意したうえで仕事をするということだ。

商売においては、買い手にも売り手にも一定のコミットメントが求められる。^(注2)「価格」が市場取引においてコミットメントを示す一義的な指標となることはすでに述べた。高倉健は言う——仕事を受けるときの基準は二つ。^(注3)ギャラが高いことと拘束時間が短いこと（野地秩嘉「高倉健インタヴューズ」）。

商品を無料で提供するのには、商売の道徳に反している。市場で価格がつかない「仕事」は仕事ではない。買い手は自分にとっての価値を判断する。それに応じておカネを支払う。売り手はおカネをいただく以上、それに見合うだけの価値があるものを提供しなければならない。それができなければ、次の注文は来ない。こうした緊張関係が生み出すコミットメントが仕事の質を向上させる。商売は私のような怠惰な人間にも ^工キリツを与えてくれる。

自分以外の誰かに向けてやるのが仕事である以上、まずは相手を儲けさせ、その結果として自分も儲ける——商売の一丁目一番地だ。約束したことは実行する。時間には遅れない。原稿であれば、締め切りは必ず守る。相手の立場に立って、相手のためを考える。

² 商売は人間を成熟させる。

自分の書いたものが売れるのであれば、紙の本でも電子版でもこだわりはない。新聞でも雑誌でもいい。自分の考えごとが読者に届くのは何より嬉しいことだ。しかも商売として対価をいただける。考えごとを言語化し、読者に提供する——こんなにフワフワした営みをして続けられている。奇跡に近い。

³ C、である。私個人としては、YouTubeのような二面プラットフォームのサブディサイドで仕事をしたいと思わない。^(注4)

YouTubeで動画を配信するとしたら、趣味の世界にとどめたい。講義やセミナーのような動画をYouTubeで配信すれば、報酬を得ることはできるかもしれない。そんなことは私の場合ありようもないが、仮に一つの動画が毎回一〇万人の視聴者を獲得すれば、YouTubeからの収入で生活できるかもしれない。しかし、その原資はグーグルの得た広告収入である。視聴者が直接支払う対価ではない。

広告が悪いと言っているのではない。特定の広告主が私の配信するコンテンツのスポンサーになってくれると言っているのであれば、その企業に對して何らかの価値を提供しているということになる。仕事として成立している。コマーシャル出演は高倉健にとっても重要な収入源の一つだった。

D、である。ほとんどの場合、YouTubeの動画配信の報酬は、グーグルが機械的に割り当てた広告によって発生する。広告主は私（の動画）に発注しているのではない。グーグルに広告費を支払っているに過ぎない。彼らは支払った広告費が私の動画に使わ

れるかどうかは知らないし、そんなことには関心を持たない。広告が視聴者に届けばそれでいい。そこには視聴者のコミットメントは
もちろん、広告主のコミットメントもない。

それはそれでいい。暇つぶしや浮世の憂さ晴らしは今も昔も重要な情報財の役割だ。需要があれば供給がある。しかし、そこには文化はない。繰り返すが、文化的情報財は人々の心に残り、何らかのポジティブな影響が長く続くものでなければならぬ。インスタントに興味を惹いて、すぐに価値が減衰し、あとには何も残らないような情報は文化とは関わりがない。文化的情報財は微分値の極大化を志向しない。文化の価値は時間軸上での積分値の大きさに表れる。文化はあとから効いてくる。

今日では地球上のあらゆる国や地域の人々がスマートフォンアプリで日常的にコミュニケーションをとっている。手紙や葉書と比較すれば、メールやチャットははるかに速くて安くて便利な通信手段である。文化の違いにかかわらず、文明はあらゆる人間にとって便利なものだ。ただし、面倒や手間というマイナスを小さくしているに過ぎない。葉書がチャットになったからといって、相手の心に残る言葉が自動的に出てくるわけではない。

（楠本建「無料についての断章」による）

(注1) 刹那的

時間が極めて短いさま。

(注2) コミットメント

約束すること。

(注3) ギャラ

労働に対して支払われる対価のこと。

(注4) プラットフォーム ː サービスやシステムを提供するために必要な環境のこと。

(注5) サブディサイド ː 無料あるいは赤字でサービスを提供される集団のこと。

(注6) 微分値 ː その瞬間の値のこと。

(注7) 積分値 ː 変化を積み重ねた値のこと。

問一 二重傍線部ア、オのカタカナを漢字に直せ。楷書で丁寧に書くこと。

問二 空欄 A 〃 D を補うのに最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を繰り返し用いてはならない。

ア しかし イ そもそも ウ ただし エ たとえば オ つまり カ もちろん

問三 傍線部1「本はもっとお買い得かもしれない」とあるが、筆者がこう考えているのはなぜか。その理由を六十字以内で説明せよ。

問四 傍線部2「商売は人間を成熟させる」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 相手に商品を提供することで対価を手に入れるという、資本主義の根幹に関わる仕組みを身をもって知ることになるということ。

イ 相手の考えを自分の思うように誘導し商談を思うように進めるために、相手の考え方を理解することが必要になるということ。

ウ お金をやりとりするために商品を提供する相手との間に緊張感が生まれることで、自分の行動に責任を持つようになるということ。

エ 商品を自分の思う値段で販売するために、社会の調査や情報の収集を行うことで新しい視点を手に入れることになるということ。

オ 商品を提供する中で多くの人とかかわること、様々な考え方に触れて自分の考え方を更新していくことが出来るということ。

問五 傍線部3「YouTubeで動画を配信するとしたら、趣味の世界にとどめたい」とあるが、筆者がこう考えているのはなぜか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 創作物を読んでも読者と対面できないまでも、直接関わりを持つているような感覚にこだわりたいと考えているから。
- イ 現代社会においてもYouTubeでの動画の配信は、文筆業と比べると仕事として社会的に認められていないと感じるから。
- ウ 自分が真剣に取り組んで作り出したものを無料で提供することは、創作活動の意欲を失うことにつながると考えているから。
- エ 報酬を払う側と受け取る側の双方が内容や金額に関して納得した上で相手の利益になるものが仕事であると考えているから。
- オ YouTubeでの広告収入という現実味のない金のやり取りに対して、理屈では理解しているものの不信感をいだいてしまうから。

問六 本文中の空欄 X に当てはまる適語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 不満足を解消し、没不満足を実現する
- イ 不満足を解消し、没不満足も解消する
- ウ 不満足を創造し、没不満足を実現する
- エ 不満足を創造し、没不満足も創造する
- オ 不満足を創造し、没不満足を解消する

問七 傍線部4「それは文化の領分だ」とあるが、筆者は文化をどのようなものだと考えているか、七十字以内で説明せよ。

問八 本文の内容を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア スポーツや音楽の分野では、世界的な動画配信の拡大とともにそれぞれの市場規模も急速に拡大しつつある。
- イ 趣味は他者の存在を気にすることなく、自分が楽しむことを優先した活動であるからこそ価値があるといえる。
- ウ 自分の考えを多くの人々に知ってもらうためには、無料で仕事を行うことも有効な手段の一つであるといえる。
- エ インターネットが普及する以前から、何も記憶に残らない情報であっても人々にとっては必要なものであった。
- オ スマートフォンでのコミュニケーションは便利なものではあるが、葉書や手紙の持っている価値には及ばない。

二

文筆業をしている五十代の「私」は、弟の嫁からの電話で、癩癩かんしやく持ちの年老いた実父との喧嘩のすえ実母が怪我をしたことを知らされ、事態の收拾のために急遽きゆうきょ駆けつけるように頼まれた。それに続く次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお出題の関係上本文を一部改めた部分がある。

とりあえず明朝渡さねばならぬ仕事を片づけて、私はタクシーを呼んだ。夜半の二時をまわっていた。多分、もう昂奮こうふんはおさまっているだろう。寝ていれば、そのまま帰ってくるつもりだった。

1 おそらく――と車中で想像した。騒ぎの発端はとるにたりないことで、父親は自制する力もなく暴力をふるおうとし、母親は身を避けて逃げたのだろう。母親は、もう五十年も父親のヒステリーの餌食えじきになっていて、本能的に深い恐怖を覚えており、いくらか大仰に飛びすぎる。逃げれば追う。殴る気で追いつがったが、同時に縁側の端までいき、そこからまだ退ろうとする母親を支える気で両手を出した。母親にはそれが突きおとされたように感じた。そんなところではあるまいか。一瞬の惑乱の中で、関係のない気持が混在していたろうが、どちらもその片々は記憶しておらず、全体が持つ大きな特長に片寄らせて思っている。そうしたことは珍しいことではない。

父親は動転し、悔い、かえって居丈高ゐさかたかになり、半分醒め、半分昂たかぶったまま、いつもと同じ恰好かっこうだと思おうとして、怪我を認めまいとする。母親は、いつもとちがう証拠に怪我があるのだ、と固執する。が、母親の年齢で折った腕が旧もとに戻るの、かなり時間がかかるのではあるまいか。その間、母親は、折った腕のかわりに父親に対する優位を獲得した気であるだろうが、老筆ろうひつした父親がはたしていつまで憶えているか。

予想したとおり、生家の跡に建った二棟は、いずれも燈が消えていた。弟は勤め人で朝が早い。騒ぎに気づいたはずの近隣も寝静まっている。私は幼い頃遊んだ路上にしゃがんで煙草に火をつけた。何十年かして、私も夜も昼もけじめのつかない、夜昼ばかりでなく自分の主体というものにもけじめを失ったまま、浮遊するように生きている。五十年の間、あれこれやってきたことは、ただ伸びひるがって拡散していくばかりで、少しもまとまりがつかない。おそらく父親も似たようなものだろう。八十年も九十年も生きて、まだ途中だというだけで、なんのまとまりもつかない日々なのだろう。

(中略)

生家の跡に建った二棟の建物はいずれも闇に包まれているが、A、庭の通用口から眺めると、奥の父親の居る棟の方の庭に面したガラス戸が一枚開いていた。私は煙草を投げ捨てて庭から中に入った。

燈を消した居間に、父親が、いつも坐る位置に **B** 坐っていた。父親は三十年ほど前から耳が遠くなり、ニュアンスの乏しい大声の会話しかできない。私が部屋に入っても、音の気配では視線が動かない。

私はファインダーをのぞくように、父親の前に顔をのぞかせた。 ² そうして、まず、微笑した。

「お前——、身体は健康か」

「——駄目なんだ。もうおとろえてきたよ」

私が顔を横に振るのを父親は見た。

「そうか。俺は少しいい。いくらかな。——もつとも、俺なんかが身体がよくなっても、喜ぶべきか」

「——悪いよりはいい」

「そうだ。悪いよりはいい」

父親は、疲れたときのような顔つきをしていた。そうして、 **C** いった。

「仕方がないな」

「——ああ」

「仕方がない。どうにもこうにも ^b 閉口だ。いつ死ねるのかわからん」

私はやっぱり微笑を返した。母親のかわりにしばらく泊ってやろうと思う。そのつもりで仕事道具を袋に入れて持ってきた。私は、いつも使っていない隣室に燈をつけ、卓を出して本を読むようなふりをした。今夜はさしあたり、急ぎの原稿はない。けれども私は、ときおり父親のそばに泊るとき、用があってもなくても終夜起きて燈をつけているようにしていた。昼間も寝ない。あいまいに少しづつうとうとする。小さい頃からの癖で、私は貴方たちの生活律では生きていませんよ、というところを見せたがるのである。そうでもしていないと、父親も母親も、私のことを単に自分たち小市民層からの脱落者としてしか見てくれず、私の生活律の存在を無視してしまうのである。私は五十になっても生家に戻るとそういうところにこだわってしまう。

私は、卓に寄りかかったまま、うとうとした。

隣室で、不自由な足を畳に擦るようにして歩く気配がし、

「おい——」

父親が嘸みつきそうな形相で、顔をのぞかせていた。父親は部屋の境の襖に ^{ふすま} すがって立っている。そうしないと上半身が折れるように前に曲がってしまう。

「電燈を消せ——」

「——何故」

「世間体がわるい。今、何時だと思う」

「——しかし、やることあるんだ」

「消せ。消せといったら消せ」

私は燈を消した。³ そのかわり、寝ないぞという姿勢を示して、庭に面したガラス戸の開いているところに腰をおろした。

「もう、夜が明けかかっているよ」

私は外の空の方を手でさし示し、父親もなんとなく空を見た。父親の顔はもう平静に戻っていた。

「茶を呑むか。呑むなら自分でいれろ」

私は茶をいれ、父親の前におき、自分も呑んだ。静かな夜明けで、外には何の気配もない。

（中略）

母親はその朝、弟の嫁につき添われて近くの大病院に行った。実際に鎖骨かなにかに罅が入っていたようだけれど、まず何よりも自分の希望で入院した。

そのかわりに、平素、父親の毒気を避けて遠くに居る恰好の私がしばらく居残る。

「おじいちゃんか、あたしか、どっちかが病院に入らなくちゃ、おさまらないわよ」

「——ああ」

「このままじゃ、あたしは殺されてしまうからね」

「——だから、お袋さんが病院に入る、ひとまずそれでいいじゃないか。ゆっくり休んでこいよ」

母親はまだ感情的になっているが、私としては笑って受け流しているよりほかに術はない。私にも意見はあるが、私が自分流の生き方をするために生家をはなれてすごしている以上、生家のことに口出しをする資格がないように思える。

まア、ちょっとそばに居てみるよ、母親ばかりでなく、弟の眼もそういつているのがわかる。

彼等がそう思う以上に、私もそのことをずっと以前から考えているつもりではある。できることなら誰よりも私が父親のそばに居てやりたい。しかしそうするためには、私は父親の兵卒にならねばならない。それができるだろうか。

私も、母親も、弟も、事情は異なっているが、三人それぞれ、父親を生家に置き去りにした時期がある。

弟は一番長く父親のそばに居たが、学校を出たあと地方本社の会社に勤務した。

母親は、戦後、自分の弟たちがやっている商売に参加し、夜だけ生家に戻ったり、戻らなかったり。しかし、父親を経済的に養ってきたという ^c 名分がある。

私は一番身勝手な、十代の頃から父親とその背後の世界とは無関係のところ自分の島を造ろうとして、劣等の方角をうろうろしていた。父親にはたえず感情移入しながら、私は神経病が途中からのハンデになったせいもあり、父親と両立しがたい生家にはいつも近寄らない。よかれあしかれ、そのうえに私の生き方が成り立っている。

父親は、実質的には、三十年余、ほとんど一人で日をすごしていた。

弟一家が東京に転勤し、経済的な事情もあって同居しはじめたとき、孫を見て、父親は D 衰えた。

母親が、外での仕事、というより外での自分流の生き方から退いて、父親のそばに帰ってきたのは昨年のことだ。父親はその時点から、また D 衰えた。

(中略)

「おじいちゃん、どう——？」

弟の嫁が、折り折りに様子を見に来る。

「まだすこし昂奮してる。明日、明後日はわからないが、今のところは、お袋のことが頭を去らないだろう」

「でも、おとなしいみたいね」

「俺じゃ、体力的に負けると思ってるから」

「それで、おにいちゃんは、ここでお仕事できそう」

「俺はたまさかだからな。気持ち(注1)が張っているから、大丈夫だよ。長くなるとわからんが」

私は一日を大過なくすごした。父親の方も私の方も特殊な日であって、大過の起きようがない。

「おじいちゃんは、おにいちゃん(注2)がくるといいみたいね」

「一緒に暮せばすぐぶつかる。それは親父(注3)が毫(こ)碌(ろく)する以前からだ」

「でもパパは嫌われてるわ」

「そうだな、弟は長いから。親父にいわせれば弟はまともな人間で、それならもっと親父に忠実になるべきだと思ってるんだ」

私は夜、弟の棟の方に行って、ちょっと話しこんだ。

「ひとつ気がついたことがあるよ。親父はきつと、幻聴にたえず見舞われているにちがいない」

弟は乗らぬ表情できいていた。

「俺の持病は、幻視、幻覚、幻聴がつきものなんだが、それで、いろんな人の声や、知り合いの家庭状況なんかは、はつきり耳の中に入ってくるんだ。むろん実際の風景じゃない。幻聴だ。それは俺自身、わかっている。ところが少し時間がたつと、あの件は幻聴の方の風景だったか、実際のことだったか、記憶がこんがらかってくるんだ。毎日おびただしい声何かを伝達してくるからね。それがいりまじってしまふ」

「それで——」と私はかまわず続けた。「親父はもう三十年も耳が遠くて、普通の会話をほとんどしていない。そのうえ一人で、話相手もなかった。親父は屈しなかったが、内攻はしているよ。きつと幻聴がずっと出てる。毫碌とはべつに、長いこと幻聴とだけ会話していたようなふしがある。たとえ幻聴だとわかっていても、それとのつきあいは深いよ。周辺の人にはわからない事象がいろいろと親父の中にはあって、我々にはどうしてそんな誤解をするのかわからないことで怒ったり昂奮したりするのかもしれない。——そこでだ、耳をとおしての会話は、特にニュアンスの細かいものは無理だが、ノートを作って皆で筆談を親父と交したらどうだろう。親父との外部の交通を復活させるんだ。紙に書いておけば、あとになって読み直すこともできる」

弟は憮然^{ぶぜん}としていう。兄貴は書く商売だから、苦にならないだろう、そういう表情もうかがわれる。

「もうおそいよ」

私は、うっかり攻めこみすぎたかな、と思った。攻めれば、攻め返される。此方^{こち}の不備も限りなくある。私は自分⁴の不備を突かれて直せるか。

弟は起き直っていった。

「もうおそいんだ。見ればわかるだろ」

「おそいな、たしかに」と私もいった。「しかし、まだとぼくちでもあるぜ。親父は、極めて緩慢に、果てなくという恰好で、衰退していく。百年生きてこうなつて、すくなくとも今日死ぬ風情じゃないから、もう百年、くだらだら下降線をたどつて居るかもしれない。俺は小さいときから——」

「俺もだよ。俺は自分が最後に一人生き残るんだと思っていた」

「そうだな——」

私は笑つた。弟は、父母は死に、兄は無頼^{（注5）ぶらい}で疲弊し、その兄を背負つて生きようと、かつて思い定めていた頃があった。

弟の嫁が、不意に腰を浮かしたので、私たちは父親がガラス戸の外に来ていることにはじめて気がついた。父親は、怖い顔をしていた。

大変だ、どうしよう、と嫁が呟いてガラス戸を開け、

「おじいちゃん、お入りなさい」

といった。父親はしばらく私たちをにらんでいた。

「何か、俺に報告すべき重大要件が定まったか。あれば報告しろ」

「なんでもないのよ、おじいちゃん」

「そっちへ行くよ」

私は父親の肩を軽く支えながら、隣り棟に戻った。

父親は、彼の定座に倒れるようにすわった。

「隣りの夫婦を呼べ」

「もう寝るだろう。あっちは朝が早いからね」

「つべこべいわずに、呼べ」

私は仕方なく、弟たちを呼んできた。

父親は放心したようにテレビを眺めていた。私たちがそれぞれの座についても、何もいわない。

「皆集まったよ」

「そうか——」と父親がうつてかわった弱い声でいった。「熊がな、庭に入ってきている。皆で探せ」

「熊、か——」

私たちはむしろ望んだように立ちあがり、三人連れだって庭に出た。 ⁶ そうして冷たい夜空を眺めた。

(色川武大「百」による)

【語注】

(注1) たまさか … めったにないさま。まれ。

(注2) 大過 … 大きなあやまち。ひどい過失。

(注3) 耄碌 …… 年をとって頭のはたらきがぶくなること。老いばれること。

(注4) とばくち …… 入り口。物事のはじめ。

(注5) 無頼 …… 一定の職業につかず、性行がよくないこと。

問一 二重傍線部 a「居丈高」、b「閉口」、c「名分」の意味として最も適當なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

a「居丈高」

ア 怒ったさま イ 威圧的なさま ウ 暴力的なさま エ 見下したさま オ 偉そうなさま

b「閉口」

ア 何とも表現できないこと イ 気持ちが暗くなること ウ 体調が悪くて苦しいこと
エ 孤独で話し相手がいないこと オ 手におえなくて困ること

c「名分」

ア 表向きの理由 イ 内々の事情 ウ 心底からの誇り エ 金銭的な貸し オ 過去のいきさつ

問二 空欄 A 〃 D に当てはまる最も適當なことを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし同じ記号を繰り返し用いてはならない。

ア ぱつりと イ がくつと ウ ふと エ ぱったりと オ じつと

問三 傍線部1「おそろく——と車中で想像した」とあるが、「私」が「想像した」ことを説明したものととして適切でないものを次の中から一つだけ選び、記号で答えよ。

ア 騒ぎの原因はささいなことであったのに、自制心がない父親が暴力をふるおうとしたということ。
イ 長年父親を恐れ続けている母親の逃げ方が、おおげさなものであったのではないかということ。
ウ 縁側から母親が転落しないように差し出した父親の手を、母親が暴力だと勘違いしたということ。
エ 父親も母親も騒動の最中の細かい部分は覚えておらず、お互い感情的になっているということ。
オ もう父親の昂奮はおさまって、弟夫婦も含めてみんな眠りにについているにちがいないということ。

問四

傍線部2「そうして、まず、微笑した」とあるが、なぜ「私」は「微笑した」のか。その理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 老年になっても落ち着けない父親に親近感を覚え、騒動のことに触れて父親を刺激することなく、父親の機嫌をうかがおうとしたから。

イ 騒動を起こしたことはともかく、父親なりに気が動転し、後悔もしているはずだから、過度に責めることはせずに、自発的な反省を促そうとしたから。

ウ 父親はもう十分に母親や弟夫婦からなじられ、気落ちしているはずだから、せめて自分だけでも温かく接することで、励ましたかったから。

エ 耳が遠くなり音では反応を示さない父親に、いきなり顔を見せ驚かせることで機先を制して弁明の機会を与えず、精神的に優位に立とうとしたから。

オ 父親が悪いのは確かだが、母親がいなくなって困ることは目に見えているので、しばらく母親の代わりに身の回りの世話をし、てやろうと同情したから。

問五

傍線部3「そのかわり、寝ないぞという姿勢を示して」とあるが、なぜ「私」はそのような「姿勢を示」そうとするのか。その理由を六十字以内で説明せよ。

問六

傍線部4「私は自分の不備を突かれて直せるか」とあるが、「私」の「不備」の中でも最も重大なものはどのようなことだとと思われるか。四十字以内で説明せよ。

問七

傍線部5「私は笑った」とあるが、この時の「私」の心情を説明したものとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分にとっては、父親が心配の種であったけれども、弟にとってはむしろ父よりも自分の方が悩みの原因であったことを思い知って、兄であるのに情けなさを感じている。

イ 弟も自分と同じように父親の世話をしなければならぬことにうんざりしていると知り、自分の父親がみんなから煙たがられていることを、あわれに感じている。

ウ 弟とは父親の世話について意見の相違があり、ぎくしゃくすることもあるが、そうはいっても弟が兄である自分のことを思ってくれていると知り、うれしく思っている。

エ 自分が最後まで生き残って父親の世話をする覚悟でいたように、弟はさらに長生きして自分の面倒を見る心づもりをしていたことを思い出し、なつかしく思っている。

オ 自分では自立して生活していくことが出来ていると思っではいるものの、弟から見るとまだまだ頼りない兄に過ぎないと思われることを、恥ずかしく思っている。

問八

傍線部6「そうして冷たい夜空を眺めた」とあるが、この時の「三人」の心情を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ただでさえ前日に父母の喧嘩があつて大変であつたのに、庭に熊が出現するという一大事にまで巻き込まれて心底うんざりしている。

イ 父親が怖い顔で現れたので、また一騒動起きるのではないかと緊張が走ったが、ただの熊退治だったので拍子抜けして胸をなでおろしている。

ウ 父親の妄想にすぎない熊の出現によって、兄弟の間で生じ始めていた亀裂の兆しが棚上げされ、ともに父の妄言に付き合い、家族のつながりを感じている。

エ 普段は怖い父親が熊におびえていることに微笑ましさを感じ、熊などはいないと思ひながら、探すふりすることで父との信頼を築こうとしている。

オ 庭で熊探しをするふりをしながら、父の幻覚が悪化しつつあることに思いをはせ、今後父の老化がますます進むことに不安な思いを抱いている。

三

次の文章は、光源氏を愛する六条御息所が物の怪となり、光源氏の愛する夕顔（女君）を取り殺す場面である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女¹ゐて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつられ」とて、この御かたはらの人をかき起光源氏は夢の中でうらになるこさむとすと見たまふ。

物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、灯も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引き抜きてうち置きたまひて、（夕顔の侍女である）右近を起こしたまふ。これも恐ろしと思ひたるさまにて、参り寄れり。^a「渡殿なる宿直人起こして、紙燭さして参れと言へ」とのたまへば、⁴「いかでかまからん、暗うて」と言へば、^{源氏}「あな若々し」とうち笑ひたまひて、手を叩きたまへば、山彦の答ふる声いと疎まし。

人え聞きつけで参らぬに、この女君いみじくわなきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、⁵「我がの気色なり。」もの怖ちをなんわりなくせさせたまふ本性にて、いかに思さるるにか」と右近も聞こゆ。いと弱くて、昼も空をのみ見つるものを、いとほしと思して、^{源氏}「我人を起こさむ。手叩けば山彦の答ふる、いとうるさし。ここに、しばし、近く」とて、右近を引き寄せたまひて、西の妻戸に出でて、戸を押し開けたまへれば、渡殿の灯も消えにけり。

（ 中略 ）

帰り入りて探りたまへば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつ伏し臥したり。⁶「こはなぞ、あなものの狂ほしのもの怖ぢや。荒れたる所は、狐などやうのもののおおびやかさんとて、け恐ろしう思はするならん。まろあれば、さやうのものにはおどされじ」とて引き起こしたまふ。ⁱⁱ「いとうたて乱り心地のあしうはべれば、うつ伏し臥してはべるや。御前にこそわりなく思さるらめ」と言へば、「そよ、などかうは」とて、^bかい探りたまふに息もせず。引き動かしたまへど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば、ⁱⁱⁱいといたく若びたる人にて、物にけどられぬるなめりと、せむ方なき心地したまふ。

紙燭持て参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引き寄せて、源氏「なほ持て参れ」とのたまふ。源氏「なほ持て来や。所に従ひてこそ」とて、召し寄せて見たまへば、ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。c

iv 昔物語などにこそかかることは聞け、といとめづらかにむくつけけれど、まづ、この人いかなりぬるぞと思ほす心騒ぎに、身の上も知られたまはず添ひ臥して、「やや」とおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり。言はむ方なし。頼もしくいかにと言ひふれたまふべき人もなし。v 法師などをこそはかかる方の頼もしきものには思すべけれど。さこそ強がりたまへど、若き御心にて、言ふかひなくなりぬるを見たまふに、やる方なくて、つと抱きて、「あが君、生き出でたまへ、7 といみじき目な見せたまひそ」とのたまへど、冷え入りにたれば、d けはひもの疎くなりゆく。8 『源氏物語』による)

問一 傍線部1「ゐ」は、ワ行の動詞「ゐる(居る)」の「連用形」であるが、古文での五十音図の「ワ行」を、例のように解答欄に

答えよ。

例 サ行(さ・し・す・せ・そ)

問一 傍線部2「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とあるが、どういうことか。次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 慕っている光源氏が夕顔のもとを訪ねようとも思わず、夕顔と比べ物にならぬ私を連れてかわいがってくれることについて、六条御息所がうれしく思っているということ。

イ 慕っている光源氏が私のもとを訪ねようとも思わず、別段のこともない夕顔を連れてかわいがっていることについて、心外だと六条御息所が恨めしく思っているということ。

ウ 慕っている光源氏が他の女のもとを訪ねようとも思わないのに、夕顔をかわいがってくれることについて、六条御息所が恨めしく思う反面、うれしく思っているということ。

エ 慕っている光源氏が私のもとを訪ねようと、私が大切にしている右近を連れていらっしゃることについて、夕顔がとてもありがたく、うれしいことだ思っているということ。

オ 慕っている光源氏が他の女のもとを訪ねようとも思ったのに、私のことを思い出し私のところに来ようとしたことについて、夕顔は動揺し、恨めしく思っているということ。

問三 傍線部3「おどろきたまへれば」、4「いかでかまからん」、5「我かの気色なり」について、訳として最適なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

3「おどろきたまへれば」

- ア 驚きになるならば
イ お目覚めになると
ウ 起こしになるなら
エ 驚かせなさるので
オ 起きなさるならば

4「いかでかまからん」

- ア とても行くことはできない
イ とても行きたいと思うのだ
ウ どうしても行くとうとするか
エ どうしても行くのであれば
オ どうして行くとうとするのか

5「我かの気色なり」

- ア 行雲流水の様子である
イ 傍若無人の様子である
ウ 茫然自失の様子である
エ 以心伝心の様子である
オ 臥薪嘗胆の様子である

問四 二重傍線部a「参り寄れり」、b「かい探りたまふ」、c「消え失せぬ」、d「けはひもの疎くなりゆく」について、誰の行動であるか。次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア 光源氏 イ 夕顔（女君） ウ 六条御息所 エ 右近 オ 渡殿なる宿直人

問五 傍線部6「こはなぞ、あなもの狂ほしもの怖ぢや。荒れたる所は、狐などやうのもの人おびやかさんとて、け恐ろしう思はするならん。まろあれば、さやうのものにはおどされじ」とあるが、光源氏はどういうことを伝えようとしているか、三十字以内で説明せよ。

問六 傍線部7「言ふかひなくなりぬる」とあるが、誰がどうなったということか、解答欄に合うように答えよ。

問七 傍線部8「いといみじき目な見せたまひそ」を口語訳せよ。

問八 波線部i～vについて、正しくない解釈がある。次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア i「むやみに臆病でいらっしやるご性分ですから、夕顔さまはどんなに恐ろしくていらっしやるか」
イ ii「ひどく気分が悪くて六条御息所さまはうつ伏しています。それにしても恐ろしくございます」
ウ iii「とても子供供している人だから物の怪に気を奪われてしまったのであるようだ」
エ iv「昔物語などにこうしたことも聞いているが、とまったく異様なことで気味が悪い」
オ v「法師などがいたら、こんな場面は寄りすぎることもできるのだろうが」